

早稲田大学 人間科学学術院 人間科学会 諸費用補助成果報告書 (Web 公開用)

申請者 (ふりがな)	福留 尚典 (ふくどめ たかのり)
所属・資格 (※学生は課程・学年を記載。卒業生・修了生は卒業・修了年月も記載)	早稲田大学大学院人間科学研究科修士課程 2 年
発表年月 または事業開催年月	2023 年 7 月
発表学会・大会 または事業名・開催場所	第 39 回日本ストレス学会・学術総会
発表者 (※学会発表の場合のみ記載、共同発表者の氏名も記載すること)	福留尚典・森滉平・森石千尋・大山一樹・嶋田洋徳
発表題目 (※学会発表の場合のみ記載)	特性的レジリエンスと過程としてのレジリエンスの関連性の検討
発表の概要と成果 (抄録を公開している URL がある場合、「概要・成果」を記載した上で、URL を末尾に記してください。また、抄録 PDF は別途ご提出ください。なお、抄録 PDF は Web 上には公開されません。)	
<p>【問題】 レジリエンスは、従来、特性的レジリエンスとして記述され、質問紙によって測定されてきた。しかしながら、主にレジリエンスは、「ストレス状況下からの回復力」と理解されることから、「ストレス状況下からの回復過程」を記述することによって、より客観的なレジリエンスの測定につながるものが指摘されている (Stainton et al., 2019)。そのため、レジリエンスはストレス曝露後の反応の枠組みからとらえる方が有用であると考えられるが、個人特性の限界点は、理論的示唆に留まっている。本研究では、実験手続きを用いて過程としてのレジリエンスを記述し、特性的なレジリエンスとの関連性を検討することを目的とする。【方法】 課題ストレス群として 21 名 (男性 11 名, 女性 10 名, 平均年齢 21.4 ± 2.2 歳), 対人ストレス群として 20 名 (男性 11 名, 女性 9 名, 平均年齢 22.6 ± 2.4 歳) を分析対象とした。測度として, (a) 特性的レジリエンス (RS-S; 斉藤他, 2010), (b) 認知的ストレス反応: VAS (SRS-18 (鈴木他, 1997) を基に本研究にて作成), (c) 唾液 α アミラーゼ測定値, (d) 行動的ストレス反応: Go/No Go 課題におけるエラー数を用いた。本研究は、早稲田大学「人を対象とする研究に関する倫理審査委員会」の承認を得て実施された (承認番号: 2019-164, 2021-010)。【結果】 両課題前後における各ストレス反応の差分値を用いた共クラスタ分析によって得られたサブタイプを独立変数, RS-S を従属変数とする一元配置分散分析を行った結果, 各サブタイプ間に有意な差は見られなかった ($F(3, 37) = 1.21, p = .32$)。【考察】 本研究の結果から、特性的な自記式尺度のみの測定では、過程としてのレジリエンスは理解することができない可能性があることが示唆された。今後、レジリエンスの実態をとらえるためには、ストレス状況下からの回復過程に対する要因について、検討することが重要であると考えられる。ポスター発表</p>	

※無断転載禁止